

総合的な学習（未来学習）の取り組み

経験を統合し、よりよい生き方を創造する総合的な学習

学習指導要領にあるように総合的な学習の時間（以下、「未来学習」とする）とは、子ども一人一人が主体的、創造的に学ぶ中でよりよく問題を解決する資質や能力を培う場、自己の生き方を考える場にほかならない。

このことに鑑みて、私たちは、未来学習の学びを以下のように特徴付けた。

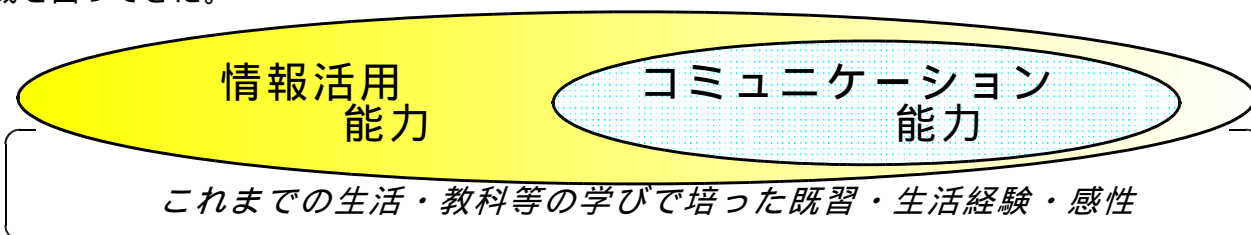
学びの対象は、多様な要素を併せもち、社会に位置付く現実的課題とする。
 子どもは、対象に対して多様なアプローチを行い、その解決の手がかりを自己が生活・教科の学びで培った全人的な資質・能力に求めていくものである。
 課題解決に向けてかかわりを求める他者は、学習集団のみならず、様々な思いや願いをもって生きる現実社会の人々である。

以上のことから、私たちは研究テーマを上記のように設定した。

1 培いたい資質・能力

(1) これまでの捉え

これまで本校では、「自然」「人」「文化」という3領域の学習を経る中で、学習対象への理解（対象理解）とともに、以下のような「情報活用能力」と「コミュニケーション能力」の育成を図ってきた。



【情報活用能力】		
参画態度 情報を扱う際の心構えや責任感等を踏まえ、自ら情報を受信・発信する対象を拡げていく態度	実践力 生活や教科等の学びを生かし、必要な情報を収集・判断・創造し、適切に発信しながら問題を解決していく力	特性理解 情報の影（モラル、マナー）や情報の特徴（目的にふさわしいものなど）に対する正しい理解
【コミュニケーション能力】		
協働態度 協調性や自己開示、相手にきちんと向き合う態度、相手から学ぶ姿勢などを総称した態度	実践力 自分（考え方、風土、言語、文化等）とは異ったものをもつ人とかかわり合いながらよりよく情報交流する力	特性理解 コミュニケーションの構成要素や構造に対する理解

(2) これまでの3観点から教科と同じ4観点への移行

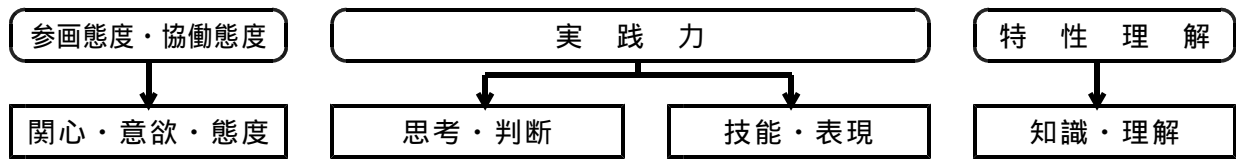
平成15年の学習指導要領の改訂では、総合的な学習の時間においては各教科で身に付けられた知識や技能を相互に関連付け、総合的に働くことをめざすことが明記された。さらに、「確かな学力」の育成に当たっては、知識や技能と「思考力」等との関連付けも求められている。

そこで、本校では各教科との関連を明確にするために、「情報活用能力」や「コミュニケーション能力」を、これまでの3観点から、各教科と同じ4観点に分類・整理することにした。

したがって、この4観点への移行は評価についても適用されることになる。加えて、未来学習においても「子どもたちに確かな学力をはぐくみ、それを評価して伝えたい」という願いが

ら、3段階評価を行い、その結果を子どもたちや保護者に伝えている。

【これまでの3観点から4観点へ分類・整理】



なお、本年度は未来学習においても「思考力」の育成を中心に研究を進めている。今後は技能・表現，知識・理解等の他観点においても各教科，さらには道徳との関連性について探っていきたいと考えている。

(3) 評価規準の見直し

未来学習で育成したい資質・能力を3観点から4観点に移行するということは、上図のように、これまでの「実践力」という観点を「思考・判断」「技能・表現」という観点到に分類・整理することだけにとどまるものではない。そのことに伴い、これまでの3観点によるマトリックス（評価規準表）も、自ずと修正を迫られることとなる。4観点によるマトリックスの作成が必要となってくるのである。

マトリックスの作成に当たっては、次のような点に留意した。

第一に、これまで「実践力」として位置付けられていた評価規準は、全てを「思考・判断」「技能・表現」の評価規準として位置付けた。これまでのマトリックスが3観点であったといえども、これらは子どもたちに是非、未来学習において育成したい資質・能力だったからである。

第二に、これからの子どもたちに育成したい資質・能力として、新たに位置付ける必要のあるものは付け加えることにした。近年、子どもたちを取り巻く環境は大きく変化し、「リテラシー」「モラル」「マナー」等に関する教育の必要性は、日に日に増していくばかりである。

こうして出来上がったのが、下のマトリックスである（「コミュニケーション能力」）。

【例「コミュニケーション能力」の修正】

	小学校中学年	小学校高学年
協働	○聞き手意識をもって、人とコミュニケーションをとることに積極的になる。	○自分の言葉を自覚し、責任をもってコミュニケーションを進めようとする。
特性理解	○コミュニケーションにおいて、経験や情報、気持ちを共有することの大切さと難しさを理解することができる。	○コミュニケーションをとることで、認識が深まったり、広がったりすることを理解することができる。
実践力	○自分の経験や考えと比べて聞いたり、分からないことを聞き返したりすることができる。 ○根拠を示したり、順序を考えたりして話すことができる。 ○主題や目的に沿った話し合いができる。	○自分の考えをまとめながら聞くことができる。 ○情報、気持ち、意見を順序立てて話すことができる。 ○話し合いによって相互理解を深めたり問題を解決したりすることができる。
思考・判断	○身近な交流相手から情報を収集し、発信しようとする。 ○情報を伝えるために、交流相手の特性をふまえて、その目的や内容を明確にして分かりやすく表現しようとする。	○交流相手の特性に応じて情報の収集方法や発信方法を選択することができる。 ○交流相手の特性を意識して自分の考えを表現する方法を工夫することができる。 ○交流相手に失礼のない言動について工夫することができる。
技能・表現	○身近な交流相手から情報を受信し、発信することができる。 ○交流相手の特性を意識した表現物を作成することができる。 ○交流相手に失礼のない言動をとることができる。	○交流相手の特性や環境状況に応じて情報の収集方法や発信方法を選択したり、模範の方法を組み合わせて行うことができる。 ○交流相手の特性や環境状況を意識して自分の考えを表現する方法を工夫することができる。 ○模範の立場の相手を意識して情報収集・発信の方法の工夫や自分の考えを表現する工夫をすることができる。 ○交流相手が気持ちよく交流できるための言動について工夫することができる。
知識・理解	○身近な交流相手から情報を収集したり、発信したりすることで、情報や経験、気持ちを共有し、認識を深めたり、広げたりできることを理解する。 ○身近な交流相手から情報を収集したり、発信したりする際に気を付けることについて理解する。	○専門家の方や他地域の方から情報を収集したり、発信したりすることで、情報や経験、気持ちを共有し、認識を深めたり、広げたりできることを理解する。 ○専門家の方や他地域の方から情報を収集したり、発信したりする際に気を付けることについて理解する。

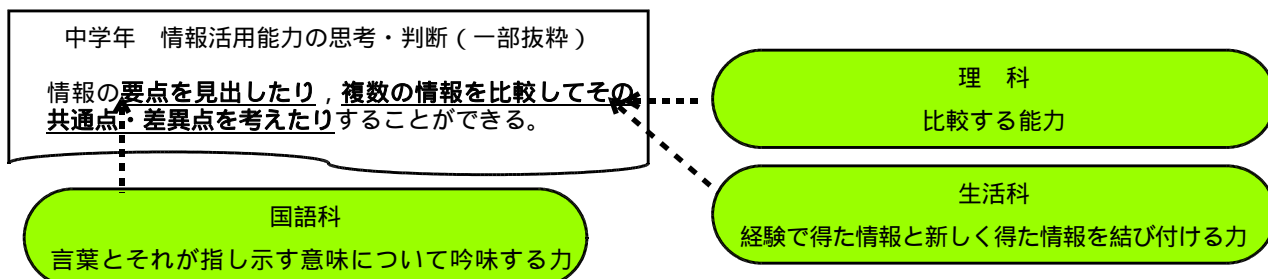
2 各教科の「思考力」を転移・活用する場面の適切なユニットへの位置付け

私たちは 章で示した各教科の「思考力」を未来学習の中で育成するため、以下のような手順でユニットに位置付けることとした。

(1) 未来学習と関連性のある各教科の「思考力」の部分を確認にする

未来学習での「思考力」と各教科の「思考力」とを比較し、ユニットで活用できる関連性のある「思考力」を確認にする。

【例 中学年「情報活用能力」】



(2) 取り扱う各教科の「思考力」を決め、適切な場面に転移・活用を図る活動を位置付ける

各教科の「思考力」を未来学習で発揮させるためには、子どもが持っているそれらを把握し、ユニットに適切に位置付けなければならない。

そこで、各教科の年間評価計画の評価規準を基に、既習経験として子どもがもつ「思考力」を確認する。そして、ユニット全体計画に書かれた「主な活動過程と子どもの意識」の項目内容とを照合し、活動過程を修正したり、転移・活用する「思考力」を取捨選択したりするのである。

また、上図の思考・判断の規準では、学習活動の情報を収集する場面では「情報の要点を見出すこと」が、情報を創造する場面では「複数の情報を比較すること」が、「思考力」にあたると考えられる。この前者に関係する教科の「思考力」は情報を収集する場面で、後者に関係する教科の「思考力」は情報を創造する場面でそれぞれ転移・活用することが効果的であろう。

このように、これまでの本校の実践と見直した「情報活用能力」と「コミュニケーション能力」のマトリックスを照合して分析すると、各教科の「思考力」は、未来学習の下表のような場面で関連付けられていることも明らかになってきた。

【各教科の「思考力」が未来学習で主に発揮される場面】

	国語	社会	算数	理科	生活	家庭科	図工	音楽	体育
情報を収集する場面									
情報を創造する場面									
情報を発信する場面									

本校では、こうした各教科における「思考力」の転移・活用を図る活動をユニット全体計画の適切な場面に位置付けている（次頁ユニット全体計画参照）。

そして、各教科の学習で作成した表現物の提示や助言によって「思考力」を発揮した場面や一般化した思考様式を想起させたり、章で示した各教科の学習指導レベルの支援を行ったりして、各教科の「思考力」をより確かなものとして身に付けることができるようにしている。

もちろん、中学年の「複数の情報を比較して共通点や差異点を考える」という「思考力」がそれ以後の社会科や理科等の学習場面で発揮されることがよくあるように、未来学習で強化されたこれらの「思考力」は再度、各教科において転移・活用されてゆくこともある。

【全体計画例 第4学年前期ユニット「つながる・広がる 人と人」】

第4学年未来学習（前期）			
○ ユニット名 「つながる・広がる 人と人」(人領域)			
○ ユニット計画 (総時数 45時間)			
主な活動過程と子どもの意識	転移・活用させたい各教科の「思考力」	身に付けさせたい情報活用能力	身に付けさせたいコミュニケーション能力
<p>【養護学校の友達とどう接すれば？】 ○オリエンテーション ○養護の友達のビデオ視聴 「仲良くなりたいな、そのためにも相手のことをよく知っておかないと……」(5時間)</p> <p>【養護学校の友達と仲良くならよう】 ○なにかしカードをつつて自己紹介 ○交流内容や自分の様子を考える おにこっこやドッジボールを一緒にしよう と思っていたけど、養護学校の先生の話ではもう少し簡単なルールの方がいいようだ。 ○交流会でペアと楽しむ 「ずっと手を握っている心が溶ちそうよ。することを写真を使ってカードに表現しておく方がいいと思うよ。」 ○交流内容や自分の様子を確認する ○おにこっこやドッジボールの楽しさ 「養護の友達のあがり気持はすごいな！もっと仲良くなるためには、相手の気持ちを充分考えないとイケないな。」(18時間)</p> <p>【運動会で思い出をつくらう】 ○ペアとともに活躍できる役割を立てる 「養護学校の年の運動会の種目を生かした種目にするのがいいな。」 ○準備や練習に励む ○運動会当日に思いをこめて頑張る 「いっしょに運動会の種目に参加して楽しかった。また会いたいなあ。」(12時間)</p> <p>【交流で得たすばらしさを広めよう】 ○ホームページをつつて発信する。 「養護学校の友達に目標に向かって頑張っていたお、いっしょに心を通わせることができてよかったな。」(10時間)</p>	<p>○交流相手に伝える方法を考える場面において、3年国語『話し合おう共に生きること』で学んだ「自分の考えを正しく伝えるために何をどんな順で話すかを考え、ポスターにまとめたり、分かりやすく伝えるための資料等を準備する」という思考様式を転移・活用させる。 <交流場面> ○養護学校の友達が使っている道具について考える場面において、3年社会『じけんやじこがおきたら』で学んだ「様々な人の立場から街づくりの工夫を見出す」という思考様式を転移・活用させる。 <情報時場面> ○運動会の交流種目を計画する場面において、3年体育『かけっこ・リレー』で学んだ「自分の力を知り、少し努力すればできそうな技を課題に設定する」という思考様式を転移・活用させる。 <情報創造場面> ○運動会の種目で使う道具について考える場面において、3年社会『じけんやじこがおきたら』で学んだ「様々な人の立場から街づくりの工夫を見出す」という思考様式を転移・活用させる。 <情報創造場面> ○ホームページに交流の様子を書き表す場面において、4年国語『知らせたい、みんなこと』で学んだ「5W1Hに気を付けて読み手に分かりやすい文章を構成する」という思考様式を転移・活用させる。 <情報発信場面></p>	<p>○交流相手の情報を得たり、自分の想いを交流相手に伝えたりするために適した情報手段を選ぶことができる。 ○ペアに伝えたいことがある場合にはどのような方法で伝えるのがよいかを調べようとする。 ○本やインターネット、養護学校の先生、昨年度交流をした先輩等からの情報を基に総合的に考え、交流の内容を計画しようとする。 ○上記の二次情報と、直接体験で得た情報を関連させることで自分のもつ情報をよりよいものに改善することができる。 ○計画や実際の交流から、あらかじめ情報を得ておくことの良さについて理解する。 ○ホームページとして発信したときの効果と影響について理解する。 ○交流相手の立場に立ち、ホームページにまとめて発信すべき内容と、発信すべきでない内容について判断することができる。</p>	<p>○ビデオに写った交流相手の様子を見て、交流の際に配慮すべき事の見直しをもととする。 ○相手の特長を考えて、相手と交流する際に必要な道具を作成することができる。 ○交流で生じた問題から解決方法を考え、次なる交流の際の自分とペアの関係づくりに生かすことができる。 ○かかわり方について養護学校の先生と話し合う中で、養護学校の友達の行論に込められた気持ちを感じ取ることができる。 ○相手と心を通わせることの喜びを味わい、次なる出会いに向けての見直しをもととする。 ○養護学校の友達との交流で学んだ相手のことを考えた行動を、同じ学校・学級の友達に置き換えて考え、これからの自分の態度について目標をもつことができる。</p>

3 未来学習で重点的に育成する「思考力」

1(3)でも述べたが、未来学習においては、各教科で育成した「思考力」を関連付けるだけでなく、本学習でこそ重点的に育成する必要のある「思考力」の育成もめざさなければならない。例えば、「情報機器の特性」や「交流相手の特性や状況」に応じた思考である。これらの「思考力」は、情報機器を活用したり、校外の人々と関わったりすることの多い未来学習でこそ、重点的に育成することが望ましい。

そこで、私たちは、前年度までの実践を基に、上記のような未来学習で重点的に育成すべき「思考力」を明確にするとともに、その力の育成に向けた、ユニット全体計画への位置付け方を検討している。

4 「思考力」育成に向けた学習形態の工夫

未来学習は、個、小集団、学級集団の間を往復運動しながら、問題解決を図っていくことが多い。本校では、この往復運動が1つのユニットの中に何度も現れるよう、計画を作成している。

こうすることで、同じ「思考力」が個、小集団、学級集団の学びの中で、複数回位置付けられることになり、その確実な定着を図ることができる。

また、未来学習は「全体の課題」「小集団の課題」「個の課題」と階層化して、問題解決をしていくことが多いため、教科学習に比べ、「全体の課題」と「個の課題」の距離が遠くなってしまふ。その結果、「全体の課題」と「個の課題」の間にズレが生じてしまうことも少なくない。これを防ぐためには、個、小集団、学級集団間の往復運動を何度も繰り返し、絶えずそれぞれの追究課題を照らし合わせる必要があるのである。

このような階層化された課題間の整合を吟味することは、未来学習でこそ重点的に育成することのできる「思考力」であるといえよう。